

日本IT書紀

006 遍路

02 溟滓篇
卷之一 契機

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第六

遍路

一

五月――。

この季節を語るとき、しばしば「風かおる」という言葉が使われる。

薫風、という言葉もある。

筆者など戦後生まれの世代は、テレビが真空管とブラウン管のモノクロ画面だった時代、NHKの第一放送で流れていた『おお牧場はみどり』という、のびやかな歌のイメージに結びつく。そのせいで誰しも、「新緑」「爽やかな初夏」というイメージを持っている。

ところが意外にも曇りの日が多い。それとメイ・ストームがある。翻訳すると「五月の嵐」。

台湾沖に発生した低気圧が急速に発達して北上する。複雑な気圧配置のために、進路の予測が難しい。たいていは日本列島に近づく前、太平洋の東方に逸れるが、十に一が沖繩諸島を北上し対馬海峡を渡る。

「五月晴れ」といいながら、「五月雨」という言葉もある。

日本という国は晴れたり雨が降ったりとまことにせわしないことだが、「五月晴れ」は四月中旬から五月中旬にかけてのころ、「五月雨」は新暦六月、つまり梅雨のことを指す。

江戸に幕府があったころ、「梅雨」という気象用語は存在しなかった。

五月で思い出すのは次の文章である。

三代の栄耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先ず高館にのほれば北上川南部より流る、大河也。

衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさし堅め夷をふせくとみえたり。

偕も義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

いうまでもなく『奥のほそみち』(平泉の条)であって、俳聖・松尾芭蕉が江戸在住の弟子・河合曾良を伴って平泉

を訪れたのは旧暦の元禄二年（一六八六）五月十三日だった。

ここに見える「大門の跡」とは毛越寺の山門の礎石であつて、一行はJR平泉駅から泉そば屋前を通つて柳御所、高館義経堂を経て中尊寺金色堂にいたつたことが分かる。

芭蕉は奥の細道に臨む二年前、

旅人と

我名よばれん 初しぐれ

と詠み、また旅立ちに臨む心境を次のように書いた。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。

舟の上に生涯を浮べ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

人は晩年に思ひいたると、旅に出るものであるらしい。

そのことを、江戸の時代の人々は

「遍路」

という言葉で表現した。

神社仏閣や霊峰への参詣を重ねる目的のほか、庶民が街

道を往くことは容易でなかった。

主要な街道が整つたのは徳川三代將軍家光、四代將軍家綱のころである。しかしそれは参覲交代の大名や遠地に赴く代官のためであつて、大きな商いをする者たちは主に船を用いた。松前船、日垣廻船が運んだのは文物ばかりではなかった。

庶民を相手にした宿屋が成り立したのは、「おくのほそ道」の旅からぐつと下つた文化・文政のころである。それでもなお、よほどの富者でなければ、路銀はおのれの懐に抱えて往くしかなかった。

その通行手形には、

万一何国にても病難・病死等仕り候わば、其の時の御作法に御取計らい下さるべく候。

尤も国元へ御付届けに及び申さず候。

其の為往来手形 仍て件の如し

の定型文が記されていた。

——もし自分が旅先で行き斃れたら、国許の縁者に知らせることなく、野辺に埋けてかまわない。

というのである。

旧街道から少し外れた古寺や堤の片隅にある石仏や土饅

頭は、その跡形であるやもしれない。

菜の花の野。海辺の路。山の木漏れ日。

そういう中を往く遍路はなるほど景色になる。ではあるのだが、その実態はこんにちわれわれの体験する旅とはおよそ異なっている。

二

二〇〇四年の五月三十一日は、前の日と打って変わってひどく蒸し暑かった。

二週間ほど前、自宅に宛てて、白い封筒が届いていた。

東京・日比谷の帝国ホテル

午前十一時半

孔雀の間

当日は朝からキャンセルできない役所の用事があった。歩けば十分ほどの距離をタクシーで行ったのは、気が急いでいたためだった。会場に飛び込んだのは刻限の五分前である。途中、エスカレーターで田中治彦氏と一緒だった。

——急でしたね。

——少し体調を崩された、とは聞いていたんだが。

というような短い会話をした。

取り急ぎ受付けを済ませ、深呼吸をして息を整えた。

会場には白布をかけた椅子が並び、後方に数列の空席があるばかりだった。ざっと見渡したところ、参加者は三百人ほどだったろうか。それほどの人が着席していたにもかかわらず、会場は静まり返り、たまにしわぶきの咳が聞こえる程度である。

正面に菊の花に包まれた祭壇が設けられ、よく見知った日焼けした顔が、新宿の高層ビル群をバックにしてにこやかに笑っている。

野崎克己——TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社創業者。

あと半年で七十六歳になるはずだった。四月二十八日、脳溢血のため死去。葬儀は親族と関係者で行われ、同社会長である船井一美氏を委員長として業界関係者向けの「お別れの会」が企画された。

受付けで渡された小冊子には、次のようであった。

生年月日

昭和3年11月1日

経歴

昭和26年3月 立教大学経済学部経営学科卒業

昭和38年12月 東京都港区神谷町で株式会社東京データセンター（現・TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社）を設立 代表取締役 に就任
平成8年6月～12年6月 取締役会長
平成12年6月～ 相談役・社主。
業界活動

昭和46年5月～昭和58年5月 社団法人ソフトウェア産業振興協会の理事、常任理事、副会長、会長代行を務め、その間――

・昭和48年10月 通商産業省産業構造審議会情報化保険制度委員会委員
・昭和52年6月 協同システム開発株式会社取締役
・昭和56年10月 中小企業庁中小企業近代化審議会指導部会情報化分科会委員
情報サービス産業従事者の福祉向上、雇用の安定に取組み、

「健康保険組合」「厚生年金制度」の設立に挺身

・昭和57年2月 情報処理産業厚生年金基金発足と同時に理事に就任

・昭和63年2月 同基金の理事長を務める

・昭和61年12月 財団法人ソフトウェア情報センター設立へ貢献

・平成3年5月 社団法人情報サービス産業協会常任理事

平成12年 現役を引退すると同時に全ての公職を辞任（自ら定めた定年制に沿って潔く後進に道を譲った）

賞 罰

昭和55年11月 通商産業大臣表彰（情報化促進への貢献）
平成元年 藍綬褒章受章（長年にわたる業界発展への功績）

「故野崎克己お別れの会」は肅々と進められていった。

かつて通産省の情報処理振興課長として、野崎氏らソフトウェア界の代表者と丁々発止で渡りあつた吉田文毅氏、情報処理産業厚生年金基金の創設をはじめ業界活動で二人三脚の相方であつたS R Aの丸森隆吾氏、情報システム安全対策コンサルタントの北村亘氏がそれぞれに送る言葉を語り、現社長の河合輝欣氏が御礼の言葉を述べた。

参列者が祭壇に花を献じた。

ホテルの係りの案内で、列ごとに起立していく。座つていたのは後ろの方だったので、立ち上がった中に見知つた顔がちらほらと見えた。

この種の会式に参列するのは初めてだったので、どういふ感想を抱いていいのかさえ分からなかつた。

自分の番がきた。

白いカーネーションを献じながら、

――教えてもらいたいことが、まだ山ほどあつたのに。

と思った。

次のインタビューは六月か七月のはずだった。

三

別の会場で軽食が供された。一画に、元氣だったところに写した野崎氏のスナップが飾られていた。

釣りが好きだった。

酒とタバコだけは、周りが何と言おうと止めなかった。奥さんを亡くしたあと、四国遍路を重ねていた。三度目の旅を思いついたとき、ふとしたことで足を痛めた。それでも杖を頼りに行った。すべての公職から身を引いたのはそのときだった。

上機嫌なときは、

「ハッ、ハー」

という笑い方をした。

最後に会ったとき、濃紺のスーツに合わせた中折れ帽が似合っていた。足を悪くしてから持つようになったステッキが、なかなかお洒落だった。

東京システム技研の北小路轟（のぶ）氏がいた。体が一回り小さくなって見えた。

——たまにメールでも下さい。

と言って、名刺の裏にメールアドレスを書いてくれた。アイエックス・ナレッジの安藤多喜夫氏がいた。相変わらずダンディだった。

元サイコムの加毛秀昭氏がいた。

——いまは熱海の伊豆山でのんびり暮らしている。遊びにおいて。

と誘ってくれた。

日本データ・エントリ協会会長の川口重信氏がいた。電算の河野健比古氏と一緒だった。

佐藤雄二郎氏がいた。情報サービス産業協会会長という重責にあつて、愚痴を吐き出すこともままならない。誰かがその部分を引き受けなければならない。

日本アウトソースの蓮生重剛氏がいた。

——書きためていた原稿を本にして出すつもりだ。と話していた。

キーウエアソリューションズの岡田昌之氏がいた。

——会長に就任したんだが、海外事業の責任者でね。近く海外に飛ぶんだ。

と意気軒昂そのものだった。

丸森隆吾氏が送る言葉を述べた後、じつと野崎氏の写真を見上げ、

——野崎さん、ありがとうございます。

と頭を下げた一言が、同氏の心から出た送る言葉だった。

——同窓会みたいだな。

誰かが言った。

式が終わったあと、廊下を歩いていると、専務の藤井吉文氏が駆け寄ってきて

——具合がよくなった。そう言って、たった一日だけ、久しぶりに会社に来られたんです。そのとき原稿に目を通してしましてね。うまいもんだ、とたいへん喜んでおられました。

倒れたのは翌日だった。

——そのときはもう意識がありませんでね。

最期まで潔かった。

原稿というのは、いずれ本書に登場する東京データセンター創業当時のエピソードである。喜んでもらえたと聞いて、救われた感じがした。

四国遍路の旅の中で、野崎氏も蝉時雨に足を停めたことがあったに違いない。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

泉そば屋 正式名は「泉屋」。JR平泉駅前、中尊寺通りに面していた。店主が気が向くと観光客に毛越寺や中尊寺、平泉の歴史を講釈してくれることで有名だった。二〇二一年十二月、百二十九年の歴史に幕を下ろした。

東京データーセンター 野崎によると一九六二年の春、個人営業の「東京機械計算事務所」を開業したのが始まりという。

神谷町と情報産業 一九五八年十一月、国策による「日本電子計算開発センター」があった。国産電子計算機を一堂に集めて、性能、信頼性、安定度などのデータを収集するため、プログラムの作成や有料の受託計算サービス、電子計算機の時間貸しなどが行われた。このため周辺にカード穿孔を行うパンチセンターやプログラム作成を請け負うソフト会社が事務所を設けていた。

ソフトウエア産業振興協会 SIA／一九七〇年五月施行の「情報処理振興事業協会等に関する法律」をトリガーに発足したソフトウエア開発業の業界団体。初代会長は国策で設立されたソフトウエア開発会社「日本ソフトウエア」社長の北代誠彌(きただい・しげひろ／1896～1986)だった。

協同システム開発 JSD／一九七六年四月、ソフトウエア開発業十九社と金融機関の出資で設立された。特許庁のシステム開発・運用保守を担うとともに、ソフトウエア工学の研究と実践などに取り組んだ。

ソフトウエア情報センター SOFTIC／ソフトウエア産業振興協会の附置機関だった「ソフトウエア流通促進センター」が前

身。一九八六年十二月、ソフトウエアの権利保護を目的に設立された。

吉田文毅 よしだ・ふみたけ／通産省ののち特許庁長官(一九八八年六月～一九九〇年六月)を経て発明協会理事長を務めた。

丸森隆吾 まるもり・りゅうご／1936～2011。一九六七年、沖電気工業から独立してソフトウエア・リサーチ・アソシエイツ(SRA)を創業した。ソフトウエア産業振興協会、情報サービス産業協会の副会長を歴任した。

北小路轟 きたこうじ・のぶ／東京システム技研社長、会長。情報サービス産業協会副会長を務めた。

安藤多喜夫 あんどう・たきお／データープロセス・コンサルタント(のち「アイエックス・ナレッジ」と改称)創業者。日本情報センター協会副会長、東京情報処理健康保険組合理事長などを務めた。

加毛秀昭 かもう・ひであき／日本計算センター(のち「サイコム」と改称)創業者。日本情報センター協会副会長を務めた。

川口重信 かわぐち・しげのぶ／1926～2023。アド・ビジネス・コンサルタント創業者。日本パンチセンター協会会長を務めた。

河野健比古 こうの・たけひこ／1937～2017。輸入車の営業の仕事を通じてパンチ業を知り、一九六七年十一月株式会社電算を創業した。日本データー・エントリ協会第四代会長を務めた。

佐藤雄二郎 さとう・ゆうじろう／1933～2010。一九八四年、日本ユニバックから独立しアルゴ21を創業した。

蓮生重剛 はすお・しげつよ／1931～高千穂交易に務めていたときコンピュータで初めて漢字を打ち出すことに成功した。

一九七一年渋谷コンピュータサービス(のち「日本アウトソース」と改称)を創業した。

岡田昌之 おかだ・まさゆき／1936～2013。

松尾三郎の女婿だった関係で三菱商事から日本電子開発に移籍し社長、会長を務めた。情報サービス産業協会副会長を務めた。

藤井吉文 ふじい・よしふみ／1942～一九七一年東京データーセンターに入り、八四年取締役、八九年(平成一)常務、二〇〇〇年専務として東京証券取引所二部、一部上場を果たした。二〇〇七年社長となった。

日本IT書紀 006 遍路

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。